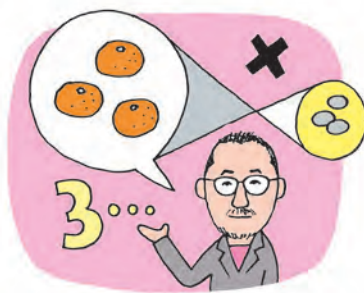


人類が他の生物と決定的に違うのは、言葉を進化させ、抽象的な概念を生み出したことだ。ミカンが三個あることがわかる動物はたくさんいるけれど、具体的なモノを指し示さない数字の「3」から始まり、具体的な数字も明示しない変数「x」が登場し、変数同士の関係性を意味する関数 $f(x)$ へ……というのは、地球上では、人類にしかできない芸当だ。

人類は、ミカン三個をリングゴ三個と物々交換し始めたが、このシステムは具体的すぎて不便だった。そこで、ミカン三個とリングゴ三個の関係性、いいかえると「価値」を媒介する関数として「お金」を発明した。私みたいな物理学が専門の人間からすると、お金というのは、複雑怪奇な関数そのものだ。

お金は地震と同じで、確率的にしか予想ができない。地中深くの微小な地殻のズレは、そこで終わるかもしれないし、周囲に波及して大地震を引き起こすかもしれないが、どちらになるのかは、誰にもわからない。スーパーコンピューターでも量子コンピューターでも計算できない。それと同じで、モノの価値や「モノとモノの関係」の価値も、確率的にしか計算できない。株価の大暴落を事前に知ることは誰にもできない。千鳥足の酔っ払いが、次に右に傾くのか、左に動くのか、誰にも(本



絵・江口修平

## 高等数学としてのお金

竹内 薫

人にも)わからないのと同じだ。

お金は高等数学だ。その証拠に、数学者がお金を「専門」に研究し始めると、信じられないような収益を上げるヘッジファンドが登場する。あるいは、仮想通貨の仕組みだって、突き詰めれば数学だ。一〇年後、AI社会が到来したとき、高等数学としてのお金は、いつか、どこまで進化するのだろうか。

こんなことを書くと、まるで私がお金の本質を理解している人みたいに聞こえるかもしれないが、高等数学を理解しているからといって、目の前のお金の扱いが上手いとは限らない。以前、物理学者の飲み会で、精算の段になって、「どうやったら最適な方法で精算ができるか」を論じている間に、お店の人が「ささっと電卓で計算してみました。お一人五三三二円になります」と言ってきて、皆で顔を見合わせたことがあるが、具体的なお金の問題は、扱うのがきわめて難しい。

目下の私の関心事は、個人的な財務状況の改善だ。無駄使いが多く、住宅ローンの利払いも見直しが必要なのだ。残念なことに、お金は私の専門外なので、社労士と税理士にお金を払って、アドバイスをもらっている。やれやれ。



たけうち・かおる ●猫好きサイエンス作家。東京大学理学部物理学科卒。マギル大学大学院修了。理学博士。AI時代を生き残るための先進教育、不登校・ホームスクーラーのためのプロジェクトを運営。最新刊は『子どもが主役の学校、作りました。』。